

特集「長信⇄短信」

テーマ

「私の好きな本」……📖

「私の好きな曲」……🎵

「私の好きな映画」……🎬

久松洋一📖 年齢を重ねることに
より、身近な存在になる作家がい
る。今年、六十四歳の私にとつて
は、川崎長太郎である。

川崎は、私小説一筋に、生涯を文
学に捧げた作家である。三十四歳
の時に、第二回芥川賞候補になっ
ているが、晩年まで受賞歴はな
く、七十五歳で菊池寛賞を受賞。
その後、芸術選奨文部大臣賞、神奈
川文化賞を受賞。小田原市文化功
労者として表彰された。いずれも
八十三歳で逝去する前の、晩年数
年での栄誉であった。

私が川崎に関心を持ったのは、
上記の経歴に加え、①蔵書をほと
んど持たず、生涯、図書館の本を活
用した。②三代後半から約二十
年間、実家の物置小屋を生活拠点
とし、電気・水道もなく、蠟燭の明
かりのもとの文学修行。③五十
歳から十五年間の小田原競輪場通
い。穴狙いの車券買いが中心。④
抹香町の玄人女性との交わり。⑤
六十歳で、三十歳近く、年齢の若い
女性との初婚、という諸点に惹か
れてのことであった。

川崎の作品は、講談社文芸文庫

で読むことが出来る。その中で
も、私のお気に入りには『老残／死に
近く』である。

川崎の文章には、気負いという
ものが一切なく、初老作家の日常
が淡々と描かれている。その作品
は、味わい深く、生活者としては癒
され、創作者としては励まされ、刺
激を貰えるものである。

『老残／死に近く』には、千代子
夫人の「人生の道案内をしてくれ
た人」が収録されている。川崎の歿
後、二十八年目に書かれた文章であ
る。私は、この文章が大好きだ。生
涯最後の著作に、最愛の女性に文
章を寄せて貰えるのは、男冥利に
尽きると言えよう。

川崎の享年まで、十九年。私も、
あと何年生きられるかわからない
が、どうやら私の晩年の読書の楽
しみは、川崎長太郎の諸作という
ことになりそうである。

菅田恵子📖 エミリー・ブロンテ
の『嵐が丘』は、イギリス文学を代
表する作品の一つ。でも、この本を
初めて読んだ中学生のときに何故

あれほどのめり込んだのかを考え
ると、かなり不思議な気持ちにな
る。

イングランドのヨークシャー
地方の冬の雪原の光景とともに
この物語は始まった。短い夏の間
だけ、淡いピンク色の花を咲かせ
るヒースが、この地方の原野をお
おう。そんな田舎に住む主人公の
ヒースクリフは人嫌いのかなり偏
屈な男なのだが、今は亡きかつて
の恋人であるキャサリンの面影と
ともに長い年月を暮らしていた。

世間の常識をはるかに越えた精
神的で神秘的な世界に繋がるこの
物語に、私は読んでいくうちにた
ちまち引き込まれた。おそらく現
実と紙一重で繋がっているもうひ
とつの世界。この両方の世界に生
きているヒースクリフの在り方
に、何故だかとても魅せられてし
まったのだ。

その思いがあったからだろ
う。学校時代は苦痛であった英語
の勉強を卒業後も少しずつだけ
ど続け、二十代の終わりが近づい